

鳥谷部 孤嶺（とやべ・これい）

1、プロフィール

県内初の歌誌「東北」・若山牧水の「創作」に出詠、また、「Romazi」・「兄弟通信」・「新時代」などを編集・主宰、近代短歌を革新する道を進んだ。

<生没>

1894(明治 27)年2月5日 ~ 1945(昭和 21)年4月 29 日

<代表作>

『大正畸人傳』

<青森との関わり>

五戸町に生まれ青森師範に入るが、筆禍により上京。ローマ字運動、兄弟愛運動により郷土の人と交流した。

2、作家解説

本名は陽太郎。明治 27 年2月5日三戸郡五戸町に生まれた。江渡狄嶺は従兄。43 年高等小学校を卒え青森師範学校に入る。新聞への投稿が曲解され、44 年放校処分となり、狄嶺の百姓愛道場を頼って上京。45 年明治学院に編入学。大正2年青森の歌誌「東北」で和田山蘭が若山牧水と呼応、破調歌を唱え、と、「第一声」12 首を発表する一方、復活「創作」にも多くの破調歌の佳作を投稿した。八戸の「乳香」にも類似作がある。牧水歌集『みなかみ』、当時の「創作」はこうして歌壇の反響を呼び、自然主義末期の口語自由詩と共生した有利な状況もあって、賛同者もあったが、牧水自身応募作の多さに辟易、制限したので、短唱・新長歌など名称も定まらぬ中に誌上から姿を消した。非定型には、生活・社会をめざし自由律・口語化する道と、定型を意識しつつ表現効果を狙っての変形との二方向があるとすれば、牧水の場合は後者で、孤嶺の場合は当時の破調歌の性格、後年の出版人としての態度からすると、前者に傾くと言える。

3年「Romazi」編集者となって、ローマ字による「おりおりの歌」を発表、諸歌人の作を載せ、7年「現代短歌」に「バラライカ」12首の力作を投稿、9年創刊した「兄弟通信」にも短歌を掲載、13年その後継誌「新時代」でも短歌欄を設け「新興歌人」主宰松本昌夫と協力する。昌夫は西村陽吉の「芸術と自由」に参加した生活派歌人である。孤嶺の三土社からは昭和3年昌夫の編した『昭和日本歌選』（口語歌・文語歌歌集）を出版、労働詩人の三谷敬六歌集『どん底より来る』、林久一の歌集『労働者のノートより』なども出版した。大正8年創刊した「創作」系の歌誌「黎明」には詩・評論のみを送り「僕は歌人ではない」と宣言したが、元歌人の自負を見せている。

社会活動として兄弟愛運動、評論では時事問題・国語国字問題などに多彩に活躍するとともに「現代語新短歌の建設」が「新時代」の大きな目標であった。昭和21年4月29日病没。法名宗賢院諦岳良進居士。

3、資料紹介

○『大正畸人傳』

図書

1925(大正14)年12月5日

180mm×130mm

三土社発行。「俗人論(自序に代ふ)」で「俗人から見ての馬鹿者共は、感覚上肉体上の快樂を超えて真理に生きる事の如何ばかり甘味なものかを味ってゐる人々なのである」と述べているが、江渡狄嶺を始めそういう大正時代「馬鹿者共」20人の小伝を記している。